

# カンボジア小学校建設支援

Y. E. B Cambodia-Japan friendship school 落成式

2012年7月22日

バランスコミュニケーション  
江見 佐智恵

はじめに・・・支援下さった方へ

大変遅くなりました。カンボジアの小学校の落成式のご報告です。

ご報告と言っても今回のこのお便りには、少し特別な意味があります。というのも、読んで頂けると分りますが、この報告は次の学校建設の支援についてのご協力のお願ひでもあるからです。

想えば昨年、震災のすぐ後に始めることになったカンボジアの学校建設支援ですが、未だに、あのタイミングで支援いただけただけのことを考えると、大きな勇気に励まされるというか、とても温かい気持ちになります。

東北の震災の復興支援と、カンボジアの学校支援・・・天秤にかけるような事柄ではないと分っているのですが、今でもその葛藤が思い出されますし、私の中では未だその葛藤がくすぶり続けているのも事実なのです・・・

しかしそんな状態でも、支援いただいた一年後の7月22日、私たち（私と5人の支援者の方）は、ご支援により建設されたカンボジアの小学校の落成式に参加することが出来ました。本当にありがとうございます。

そしてその全てのプロセスを通して、

「支援していただけた皆さんにも、この落成式に参加して欲しかった…」

本当に、本気でそう思ったのです…というのも私にとってその体験は、「カンボジアの村の人たち、子供たちから感謝される」というような単純な体験ではなかったからです。

それは、言葉にまとめるのが少し難しい感覚ではあるのですが、日本の一般人である私たちのお金が、カンボジアの数千人かそれ以上の人たちに対して、『教育により未来の可能性に貢献できる』ということ、本当にリアルに実感できる体験でした。そして、そこから生まれた感覚は、『過去のいつかの日本人たちとの出会い』であり、それは何か、特殊な、時間を超えた恩返しのような体験だったのです…

現代の日本に生きる私たちは、直接的に教育ではなくても、日常的に身近な誰かの『未来の可能性』を支援していると思います。

それは例えば、自分の子供に対する躾や教育であったり、会社の後輩に対する指導だったり、何かの伝統芸能等のお稽古などであったり、少し見方を変えるならば、新しい何かを発見し世の中に貢献することや、新しい物を作ったり、新しい建物を建てたり、新しい仕組みを作ったり…あるいはそれらの仕組みを維持するために、忍耐強く勤め続けることや、不断の努力を続けること…『未来の可能性への支援』…それはおそらく、ごくごく日常的な、退屈と感じる日々の中で、あまり意識されることなく繰り返されていることだと思うのです。

つまり、少し大げさにいうならば、私たちの日常の全ては、『誰かの未来の可能性に対する支援』であり、そして、日常生活の全てが『過去の誰かから支援のお陰である』とも考えられるのです。

そして私たちは、過去の誰かへの感謝を常に欠かしていません。支援をしてくれた過去の誰かは、現在の私たちの豊かな日常を思い、努力を続けてくれた訳ですから、私たちがより良く日常を豊かに生きようと努力することが、そのまま過去の誰かへの感謝になると思えるからです。

そして私たちは、過去の誰かへの恩返しを続けているとも考えられません。私たちが日常的に誰かを支援することは、過去の誰かの想いを引き継ぐことであり、それがそのまま、過去の誰かの支援に対する恩返しになると考えられるからです。

しかしです。私たちは過去の誰かの苦労や、その気持ちを知ることが出来るのでしょうか？海外への支援が可能なほどに豊かな日本を創った人たちの、気持ちを本当に理解できているのでしょうか？

実際に、それを理解出来ることにどれほどの意味があるか分かりませんが、(バラコミの理論では、先駆者の苦労を知ることとは、その仕組みから発生するトラブルを回避できるとも有益な方法ですが；) 私たちは、過去の誰かのその時代の気持ちを知ることが難しいと思うのです。そして、本当の感謝や、本当の恩返しは、その時代の苦労や、気持ちを知ってこそだとも思えるのです。

しかし、その時代の苦労や気持ちを理解することは、おそらくとても難しいことなので、それは当然なのですが、その人たちは、すでに過去のどこかの時代に生きた人たちだからです。

その人たちとは、明治時代の人かもしれませんが、それ以前の人かもしれませんが、初期の教育に係わった人かもしれませんが、戦後の教育に携わった人かもしれませんが。

何が正しいのか、どんな教育が正しかったのか、今、判断、評価出来ることもあるとは思いますが、多くのリスクを抱えた、たくさんの人たちが、その時代、時代の正しさを追求した結果が、現在の日本だと思うのです。

私はカンボジアの学校支援に係わる中で、おそらく過去の日本のどこかの時代の人たちに出会った気がしました。

例えば昔の日本に、自身が遠い学校まで歩いて通った経験から、自分の村に学校を建てようと運動した人もいたはず。あるいは、学校を村に建てるために政治家になったような人もいたかもしれません。あるいは学校という制約があったからこそ、そこからドロップアウトして、発明家になったり、有名な作家になった人もいたはずなのです。

そして、少し立場は違いますが、日本に西洋的な教育を持ちこんだ人々も、侵略的、政策的、宗教的（宣教的）な目的があったにせよ、誠心誠意教えようとしたはずですし、それを学ぶ日本人の勤勉さを、やはり好意的に感じたはずだと思います。

つまり、私が今回の学校支援により感じたのは、過去の日本のどこかの時代の人たちとの交流だったのです。

カンボジアの田舎は、日本の田舎とは違いますし、思想も人種も文化的な背景も、何もかも違うのです。しかし、村の人たちとの触れあいの中で、私は過去のどこかの日本人に触れることが出来たと思うのです。それは、握手をしたおばあちゃんやゴツゴツした手、細いのですがしっかりと握った、きつと農作業や重労働で使いこまれた手でした。そして、子供たちの好奇心と親切さ。日本の子供たちがかつてそれほど明るい表情で外国人に接したことがあるかは分りませんが、日本の子供たちもすごい好奇心で、どこまでも親切だったのではないのでしょうか。そして、学校建設で村中の人たちが集まるような価値観もとても大事に感じました。

私はこれらを学校建設の視察から落成式までの間に体験しました。実は、落成式以前に、「もう一校建てられたらな：」と漠然と計画していたのですが、この経験から、

「もう一校、学校を建てるように呼びかけてみよう。そして、もしも可能ならば、支援者の方に落成式に参加してもらえるように：」という気持ちが強くなったのです。

もしも今回、ご支援いただいけてなかったら、私はこんなにも貴重な体験は出来なかったと思うのです。つまり、私は、学校の落成式について報告だけではなく、私自身の気付きと、その少し特殊な経験の中身を、報告することが、ある意味の誠実さであると感じたのです。そして、それが今回の物語風体験記を書くに至った理由なのです。

本当に、本当は是非、支援者の方にも視察旅行と落成式に参加して欲しいと思っています。おそらくは日本では経験できない体験ですし、日本人だからこそ（現代の日本の経済力と文化レベルがあつてこそ）可能な経験だとも思うのです。

私にとって、過去のいつかの日本人を感じる体験は、自分が日本人であることを深く感じる体験でした。よろしければ落成式の物語を読んでください。

今回も多くの方の助力により、この物語はまとめられました。この場を借りて感謝したいと思います。ありがとうございます。

## カンボジアの小学校 落成式

### □出発の日の朝

午前6時。激しい雨の音で目が覚めました。

「ああ……これは、空港までちよつと大変だな……」

私はベッドから体を起こし、少しため息を混じりで深呼吸しました。

今日はいよいよ、カンボジアへ向けて出発の日なのです。

関西国際空港、午前十一時三〇分発の便でプノンペンに向かいます。逆算すると8時前には自宅を出なければなりません。

少しぼおつとしたままキッチンに向かうと、テーブルには、梅干しとおかかのおにぎり、鍋の味噌汁からは湯気が上がっていました。私がしばらく日本を離れるからなのでしょいか、最近はめつきり朝食を作らなくなった母も、氣遣つてくれている様子です。

おにぎりを味付のりでくるんで頬張りつつ、ベランダから外の様子をうかがうと、雨は先程よりすこし小降りになっていきます。

今日は大荷物です。旅行用の大きなキャリーバックに、孤児院の子供達へのプレゼントの入ったポストンバック、さらにパソコンとビデオカメラが入ったシヨルダーバッグ……当然のように傘を持つ余裕がありません。雨が止みますようにと祈りながら、出掛ける準備を始めました。



## □空港に向かう

本当に有り難いことに、出発の頃には、雨がちょうど止んでいました。マンションの入口まで見送ってくれた母に手を振り、湿ったアスファルトの道をキャリーバックを引きつつ駅へと向かいました。

最寄り駅までの徒歩の一〇分は、少し汗をかく程度ですみました。

朝の8時。阪急電車はちょうど通勤ラッシュです。私は比較的空いてそうな乗り場から電車に乗り込み、なるべく邪魔にならないようにと、扉のすぐ横の小さなスペースに重ねて荷物を置き、その側に立ちました。

駅を通過する度に人が乗ってくるので、どんどん混み合ってきて来て、車内の温度も上がってきます。私は大きなバックで少し申し訳ない気持ちになりながらも、カンボジアでは絶対に体験できない満員電車に、日本の凄さというか、文明を感じました。

最寄り駅から4駅。私に近い一番端の座席が空きました。周りを見ると、どうやら私が座っても大丈夫な空気です。(お年寄りや体の不自由な方もいませんでした…) 私は遠慮がちに座席に座り、少しほっとして額の汗をぬぐいました。

阪急電車、終点の天下茶屋駅に到着。隣接する南海電車に乗り換えです。鉄仮面の愛称で知られる特急ラピートに乗り、1時間程で関西国際空港に到着しました。

この頃には、外はまたかなり激しい雨が降っており、タイミングが良く移動出来て、本当に助かったと思いました。

## □空港到着

チェックインし、両替を済ませ、搭乗ゲートに向かいます。ちょうど夏休みに入った時期でしたが、空港は思っていたよりも空いていました。

関西空港からバンコクまで約5時間、バンコクからプノンペンまでは約1時間。

「順調にいけば、今日の夜にはカンボジアにいる……」そう考えると、少し不思議な気持ちになりました。

カンボジアの天気を確認すると、週間天気予報は見事に連日の雨マークです。雨季のカンボジアの気温は、夏の日本と似た同じ位で三〇度前後です。東南アジアの雨季は、日本の梅雨のように、一日中雨が降ることはほとんどありませんが、毎日、午後になると激しいスコールがあり、スコールの後は、気温がちよつと下がり涼しくなります。

## □機内にて

搭乗のアナウンスがあり、機内へと乗り込み座席を探すと、機首に近い非常口横の窓側の席でした。乗客の搭乗も終わり、振り返って後方の座席見てみると、半分くらいの座席が空いていました。お陰で、私の隣の席も空席で、ゆつたりと座ることができました。

離陸のアナウンスの後、大きなエンジン音を発しながら飛行機は飛び立ちました。

私は窓にぶつかった激しい雨が真横に流れていく景色の向こうに、かすんでいる関西の街並みを少し現実感なく眺めていました。5時間後にはバンコクのスワンナプーム空港に

到着なのです。

シートベルト解除のアナウンスが流れて間もなく、通路側の隣の座席に『ドカツ』と、何かが置かれる感触がありました。私が窓から振り返ると、通路側の座席の女性が、隣の空いている座席に荷物を置いた所でした。特に私に気を使うこともなく、当然のように荷物を置いて一言もないその態度に、少し嫌な気持ちになりました。しかし……

『自分が誰かに発生させた感情が誰かから返ってくる』  
ほとんど反射的に、バラコミの『カルマの法則』が頭に浮かびました。

「きつと私もどこかで同じ事をしているんだ……そして誰かをこんな気持ちにさせている……」

私は「誰をそんな気持ちにさせたんだろう」と思い巡らしつつも、これくらいの事で嫌な気持ちになっっている自分に、更に少し凹みました。

「カウンセラーという仕事をさせてもらっている私が、こんなではなあ……」  
そんな風に、クライアントの方に対して申し訳ない気持ちになりました。

その後は気を取り直し、落成式の資料に目を通したり、スピーチの内容を考えたり、本を読んでみると、程なくしてバンコクに到着しました。

飛行機を降り、乗換えの手続きを済ませ、プノンペン行き飛行機の搭乗口へと向かいます。もうそこには日本人の姿はありません。おそらく、タイ人とカンボジア人が大半で（私には見分けが付きません）、あとは、西洋系の人、インド系の人達がちらほらです。

私は少し心細い気持ちになりながら、再びカンボジア行きの機内へと乗り込みました。

これからカンボジアの首都であるプノンペン空港までは約1時間のフライトです。

飛行機が飛び立ち、座席のポケットに挟まれているタイ語で書かれた機内誌をパラパラとめくって、少しいとうとしかけた頃に、間もなくプノンペン到着する旨のアナウンスが流れました。搭乗時には明るかった外の景色は、すでに真つ暗になっていました。

やがて、飛行機は「ドスン」という音と振動とともに着陸しました。

飛行機をから降りると外は予報どおりの雨で、もわあつとした蒸し暑い風は、日本とは違う、土と機械と焼けたオイルのような匂いがしました。

入国審査を済ませ、ターンテーブルから出てくる荷物を取り、到着ゲートへ向かいます。

到着ゲートには、KHJ（カンボジアの建設会社）のスタッフ、3人が迎えに来てくれていました。みんなニコニコしながら、遠くからでも分かるように、大きく手を振って来ています。スタッフのリーマン、ピローム、井戸さんです。

リーマンは日本語がペラペラで、私がカンボジアに行く時はいつもガイド兼通訳をしてくれています。とても頭の良い好青年です。

ピロームはリーマンの助手兼運転手です。照れ屋さんでとても優しい青年です。彼も、リーマンほどではありませんが日本語が話せます。

井戸さんは、日本人の女性スタッフです。カンボジア支援の窓口を務めてくれています。

「お疲れ様です！カンボジアへようこそ！」

リーマンの流暢な日本語を聞くと、約一年ぶりの再会が、何かとても懐かしいもののように感じました。

空港からホテルに向かう道は、信号も車線もない道路を、車とバイクが車間距離を空けずに列を作って走って行きます。たまに渋滞で車が止まると、物売りの子供達が、止まっている車の間をぬいながら、花や新聞を売りに駆け寄ってきます。そんな風景を見ていると、「カンボジアに来たのだ」という実感がだんだん強くなってきました。

※今回の落成式には、日本から5名の支援者の方が参加されました。みなさん、それぞれ、前日に到着し、ホテルで集合となっていました。

### □落成式の当日の朝

当日の朝、快晴です。天候によっては、かなり酷い目に遭うのではないかと心配していたので、ほっとしました。

6時半。私達は前日の慣れない移動で、すでにちよつとだけ疲れた表情で、迎える車に乗りホテルを出発しました。この時点では、落成式で、参加された支援者、一人一人に簡単なスピーチをしてもらうということ以外、今日一日がどんな展開なるのか全く聞かされていませんでした。

車に乗るとリーマンから、今日一日のおおまかなスケジュールの説明がありました。

どうやら、落成式にはカンボジアの大臣（首相顧問）と奥様（首相の妹さん）が参加されるというらしいのです。そして、それに伴ってのことらしいのですが、村にはすでに、TVや新聞などの報道陣が沢山取材に来ているらしく、私達が想像していた以上に盛大な式になるようで、私たちは思わず顔を見合わせました。

そして更にちよつと驚いたのですが、これから向かうレストランで、大臣との朝食会？が催されるということらしいのです。

「大臣とお会いするのであれば、丁寧なクメール語で挨拶しないと……」ということで、急遽、リーマンに丁寧な挨拶を教えてもらうことになりました。

カンボジアでは丁寧に挨拶をするとき、両手を胸の前で合わせ、「チョムリアップスオー」と言うのだそうです。

私たちは車の中でお互いに、「チョムリアップスオー」と挨拶の練習をしました。

### □朝食会

挨拶の練習で少し緊張がほぐれ、冗談が飛び交うようになった頃、前方を見ていたリーマンから、

「まもなくレストランに到着しますよ」

というアナウンスがありました。みんなで道の先を見ると、数台の駐車した車の先、人だかりが見えました。

近付くと、そこがレストランの入り口らしく、二〇〇三〇人の人達が、何やら楽しそうに話しているようでした。車をレストランの少し手前に駐車させ、リーマンに先導されるまま、私たちは緊張しながら人だかりのほうに向かいました。

リーマンを先頭に人だかりに近付くと、そこにいる人たちの好意的な好奇心のような空気が伝わってきます。リーマンは数人と挨拶を交わし私たちを紹介したあと、「お店の入り口のところには大臣がいますよ」と教えてくれました。私たちはリーマンに続く形で談笑する人達の間をすり抜け、大臣のいる入り口へと向かいました。

人だかりを抜けたレストランの入り口に、紺色のスーツに身を包んだ大臣らしい男性が見えました。銀縁メガネ、8対2にぴちっと固められた髪、60代位の人物です。隣には、鮮やかなオレンジのスーツを着たふくよかな女性が、寄り添うように立っています。

「大臣と奥様ですよ」

リーマンは小さな声で教えてくれた後、大臣に近づき私達を紹介しました。

私たちは大臣の前に出て、先程教えてもらったばかりの挨拶をします。

大臣も微笑みながら「チョムリアップスオー」と、両手を胸の前に合わせて挨拶を返してくれました。奥様もにっこり微笑み挨拶を返してくれました。

導かれるままレストランの中に入ると、すでに2、30人の人達が朝食を食べ始めています。おかゆ、チャーハン、麺類、牛肉の炒めたものなど、日本人の感覚からすると、かなりしつかりした朝食が、それぞれのテーブル上に並んでおり、みんな楽しそうに話しながら、美味しそうに食べています。

大臣がレストランに入ったこともあつてか、先程、外で談笑していた人達もどんどん中に入りテーブルに着いてゆきます。子供の姿もちらほら、家族連れも多く見られます。やはり、総勢で5、60人の人たちがいるようです。

私たちは少し待たされる形で、レストランで立ち止まりました。人がたくさんで、移動もままならない感じでした。私はこの時、少し気になったことをリーマンに小さな声で尋ねました。

「ここにいる皆さんって、全員、大臣の関係者の人たちなんですか？」

「はい、そうです。みんな大臣の取り巻きの人達です」笑顔で返ってきます。

何でも、カンボジアでは大臣が式典などに参加する場合は、このように親戚や関係者も一緒に行動するのだそうです。

たくさんの人たちの着席するのを待った後、私たちは、真ん中に用意されていた、主賓席と思われるテーブルに案内されました。やはりというか、大臣と同じテーブルです。

少し落ち着いて周りを見ると、このテーブルに限らず、食事をしている全ての男性は、スーツか仕事用の制服を着ており、女性は、赤や青やオレンジなどの派手な色合いのスーツやドレスに、煌びやかな宝石を身に着けています。

それに比べ私たちは、一般的な旅行者のようなシャツにパンツ姿。言わば普段着のような出で立ちなのです。



「落成式は普段着で良いですよ」

そうリーマンから事前に聞いていたのですが、

「これ、普段着じゃダメでしょう：」

そうみんなで吹き合いました。

### □ブラサツトガアト村へ

リーマンに通訳してもらいつつも、割と静かに楽しく、申し訳ないような、少しいたたまれないような気持で朝食会は終わりました。ご飯はおいしかったです。

朝食会后、『大臣ご一行様』と一緒に、メコン川のフェリー乗り場に向かいました。

警察の車が先導し、すぐ後ろに大臣を乗せた車が続き、それこそ大名行列のように、取り巻きの人達の車が続きます。私達を乗せた車はどうやら最後で、私たちの後は警察の車でした。

フェリー乗り場までの道中も、両側にたくさんの方官がいました。車はとても物々しい警備の中を走り、フェリー乗り場に到着しました。

通常、目的の村にはメコン川を渡る乗り合いのフェリーを利用するらしいのですが、今日は特別に、大臣ご一行様の貸切りになっているとの事でした。

『大臣ご一行様』と私たち（と乗って来た車）は、ミルクティー色に濁ったメコン河を、ゆつくりと、30分ほどかけて渡りました。落成式が行われるブラサツトガアト村は、ここからさらに車で走り、小舟に乗って川を渡った先にあります。

車はさらに田舎道を進んでゆきます。道の周りには田んぼや畑がずっと先まで続いています。途中、何度か乗合タクシーとすれ違いました。タクシーといっても、ボロボロの小さなトラックの荷台に、乗れるだけの人達をぎゅうぎゅうに積みこんで、かなりのスピードで走ってゆきます。そして、そんなせわしない人々とはまた別に、同じ道を背骨がゴツゴツと浮き出たやせ細った牛が、ゆっくりと歩いているのです。

私はこの、カンボジアの日常的な光景を見ながら、昨年、村を訪れた時の事と、今回のチャリティーについての葛藤を思い出していました…

昨年10月のカンボジアは、ちょうど雨季の真っ只中でした。しかも、例年以上に大雨が続き、道も畑も田んぼも道路も全て冠水していました。つまり、今この車が走っている道路も全く見えないう状態だったのです。

車が使えないということで、小舟を使って村に向かったのですが、2メートル以上冠水している所もあって、バナナの木の頭がちよくちよく見えているくらいで、村はまるで大きな川か湖のようでした。

前回そんな状況だったので、今回の私は、初めてみる景色ばかりでした。実際、カンボジアの田舎の風景はどこを見てもそんなに変わらないと思うのですが、それでも昨年見えなかった道 را 走り、あの時、水面下にあった田んぼや畑に作物が実っている様を見ると、先の災害から復興に向かう東北の被災地について考えさせられることになりました。

今回の落成式が行われる学校建設のチャリティーは、まさに、震災の、その年のものです。いろいろな葛藤のあった震災後すぐのカンボジアへのチャリティーでした。チャリティーイベントを開催したものの、それ以上に、多くの方からご支援をいただきました。今考えても、あのタイミングでのご支援には、少なくない葛藤があったと思うのです。

同じ日本人への支援か、カンボジアへの支援か……『見える支援』を強く訴えたことで、支援を頂いた面もあると思うのですが、純粹に、『カンボジアの学校建設』という部分に何かを見てももらえたのではないかと思うのです。当然、今回のカンボジアの学校建設に支援いただけた方は、すでに、震災復興のための寄付をされた方だと理解しています。しかし、こうして、落成式に代表者として参加させてもらって、とても有り難いというか、いただけた支援の有り難さが身にしみる感じなのです。昨年あの状況で、支援をしていただけで、本当にありがたいとございました。お陰で無事に学校は建設されました。お陰で私も落成式に参加できます。村の子供たちも学校に通えます。これから何十年も、たくさん可能性が生まれると思います。本当にありがとうございます……

少し脱線しましたが、私は今回の支援について取りとめなく、車に揺られ、風景を眺めながら考えていました。自然に涙が出て来ました。本当にカンボジアの支援に係われて良かったと思います。

「ここからは舟に乗って村にゆきます」  
リーマンから案内があり、まもなく車は止まりました。  
車を降り、案内に従い、細い未舗装の道を歩いてゆくと川が見えてきました。岸边には小

小さな舟がとまっており、近付くと、どうやら小さなモーター？で動くボートであることが分かりました。対岸は見えており目的の村まであと少しのようです。私たちは、『大臣』一行様』に続いて、同じ舟に乗り込みました。人数が多いので立ち乗ります。頑丈そうには出来ていましたが、へりの部分がとても浅く、端の方で油断して立っていると川に落ちてしまひそうです。

船頭さんが小さなモーターを器用に動かして、ゆっくりと進んでゆくと、対岸の生い茂った木々の間から、青色の細長い大きな看板が見えてきました。看板の下には沢山の人が集まっている様子です。

だんだんと舟が近付きよく見えるようになりますと、カメラを持った報道関係者と警察などの制服を着た人たち、そしておそらくは、一般の村の人達が大勢でこの舟の到着を待っているようでした。

舟は看板の正面の岸にゆっくりと横付けられました。

大きな青い看板の両端には、カンボジアと日本の国旗が描かれており、金色の文字で、

**「Y.E.B Cambodia-Japan friendship school」**

と書かれています。

私たちの支援により建設された、本日、落成式が行われる小学校の名前です。

たくさんの人たちの待つ岸に下り立って、青い学校の看板を見上げると、その両脇の白い門構えのような柱がありました。この白い柱が、近くで見るとかなり立派なもので、少

し驚きました。

報道関係者が大臣や私たちの姿をバシヤバシヤと撮影しています。なんだかちよつと芸能人や有名人になった気分です。報道関係者の周りに警備の人達、その外側には村の人達が遠巻きに見ている様子です。村の大人たちの後ろの方には子供達の姿も見えますが、その向こうは少し坂道にもなっており、たくさんの人たちに隠れて門の先の道がよく見えませんでした。

私たちが少々圧倒されながら、「この次はどうすればいいんだろう？」と目を合わせていると、人ごみの中から、金色の綺麗な柄のブラウスにオレンジのスカート、濃い目の化粧をした女の子の四人組が表れました。その内の二人が手にしたお盆には、白いジャスマンの花で編んだレイがたくさん載せてあり、残りの二人が、そのお盆からレイを取り、大臣、奥様、私たちの順に丁寧にかけてくれました。

レイを首にかけてると、フワツと甘いジャスマンの香りが優しく広がります。なんだかとても不思議なのですが、この時、本当に純粹に歓迎されている気がして、緊張していた心が少し楽になったように感じました。

レイの歓迎が終わると、目の前にいた報道関係者や警備の人たちが、すうーと左右に分かれました。すると先程まで、見えなかった門の先の道が見えて来ました。

道の両側にたくさんの村の子供たちが、日本とカンボジアの小さな国旗を手に、待ってくれているのでした。

思い思いに旗をふる子供たちと村人の拍手の中、私たちは大臣に続き、この花道を落成式の間行われる会場に向かって歩き出しました。日本の国旗とカンボジアの国旗。みんなが旗を振り、拍手をしてくれています。飛び跳ねながら旗を振っている子、大きく旗を振りまわしている子、一生懸命に手を叩いている子、不思議そうに私たちを見つめている子、みんな愛くるしく、そしてそれが日本の国旗と重なって、なぜだか、本当に涙があふれて来ました。

そんな歓迎の中を100メートル程進み、ゆるいカーブを曲がると、クリーム色をした小学校の校舎が見えてきました。写真で見るとはまた印象の違う、しっかりとした頑丈そうな建物です。校舎の屋根を支える柱の部分には、青と黄色のリボンで綺麗に装飾が施されており、柱の上方にはカンボジアの国旗と日本の国旗が交互に飾られています。その旗が風に揺られて時々重なりあっている姿が、なんだか私たちを歓迎してくれているように見えました。

※カンボジアの小学校は、色や形などに規格があり、基本的にどの小学校も同じ形をしています。校舎は平屋建て、屋根の色はえんじ色、校舎の壁面はクリーム色です。今回の支援により建てられた校舎には5つの教室があり、約3〜400人の子供達が2部制でこの学校に通うこととなります。

校舎の周りでは、キャツキャと元気な声を上げながら、沢山の子供達が走ったり遊んだりしている様子が見えます。新しい綺麗な校舎が出来て、子供達も興奮しているようです。

た。

校舎の前に、落成式用の綺麗に装飾された大きなテントが設置されているのが見えました。その周りにたくさんの人たちが集まっています。

テントに近付くと、テントの奥、後方にいる人達の姿も見えてきました。近付いて分つたのですが、ちよつとした野外コンサート並みに人が集まっているようです。おそらくは1000人は超えている様子です。みんなこちらを見て、日本の国旗とカンボジア国旗を手に、旗を振り、拍手をしながら迎えてくれます。私たちがテントに近付くにつれ、その音はだんだんと大きくなりました。

私たちがテントに到着すると、クメール語のアナウンスが大きく響きました。そしてその直後に、割れんばかりの大きな拍手が湧き起こりました。

大きな拍手が鳴り止まない中、私達はテントの正面に設置されたステージ上の来賓用の席へと案内されました。来賓用の席の周りは、沢山のリボンと美しい色鮮やかな布でとても綺麗に飾られていました。一番前の席に大臣と奥様が座り、私達は大臣の真後ろの席に並んで座りました。私達の後ろに大臣の取り巻きの方達が座りました。全員が席に着き終わるまで、拍手は鳴り止みませんでした。

私たちが席に着くと、花道を作ってくれていた子供達や、校舎の周りで遊んでいた子供達も、テントの下に集まって来て着席しました。おそらく今この会場には、ブラサットガアト村のほぼ全ての人達が集まっているといった感じですが、村の人達の嬉しそうな表情を

見ると、この日を心待ちにしてくれていたのが伝わってきましたが、この後、こんなにもたくさんの人たちの前でスピーチをすることを考えると、緊張が高まりました。

テントの最前列には村のおばあちゃん達が座っています。

私は、昨年村を訪れた際に、おばあちゃん達がしわくちやの手で、「ありがとう、ありがとう」と、いっぱい握手をしてくれた事を思い出しました。

これまで村には学校がなかったので、子供達は、毎日舟で川を渡り、対岸にある小学校に通っていました。小さな子供が舟から落ちて、おぼれてしまう事故もあり、おばあちゃん達は岸に座って、孫が帰ってくるのを心配しながら待っていたという話を思い出しました。

おばあちゃん達のしわくちやな笑顔や優しい表情を見ると、これから安心して孫たちが学校に通えることへの喜びが伝わってくるようでした。

これまでこの村には全く学校がなく、村で初めての学校建設となった訳ですが、海外からの支援が村に入るのも、もちろん初めてで、それだけにこの学校建設が、村の人達にとって大きな希望になっているということでした。

大臣をはじめとする来賓の数、落成式の盛大さからも、ブラサットガアト村の発展に対する期待の大きさを感じることができました。

### □落成式でのスピーチ

いよいよ落成式が始まりました。



最初に、六、七人のお坊さんによる読経があり、うやうやしく祈りの儀式がとり行われました。私自身、こんなに独特な神聖さが漂う儀式は日本でも体験したことがありませんでした。(※カンボジアのこのような式典では、必ずお坊さんに来てもらいお経をあげてもらうのだそうです。後から聞いた話なのですが、実は、今回の落成式には、特に偉いお坊さん達が集まっておられたのだそうです)

荘厳な祈りの儀式が終わると、続いてカンボジアの国家斉唱、そして、日本の国歌斉唱が行われました。

私自身これまであまり真面目に、国歌を斉唱したことがなかったのですが、この時は自然に声が出ました。そして、それがなぜだかとても自然で、誇らしい事のように感じて、「私は日本人なんだな……」と思いました。

その後、美しい民族衣装を身にまとった少女たちが、カンボジアの伝統舞踊を披露してくれました。とてもよく練習された踊りであるのが伝わりました。少女たちが踊り終わると、大臣から、あらかじめ白い封筒に入れて用意されていた謝礼が、少女たち一人一人へ手渡されました。みんな手を合わせ、丁寧にお辞儀をして大事そうに封筒を持ち、うれしそうに座席へと戻ってゆきました。

次に、村の子供達を代表して、白いブラウスに紺のスカートという制服姿の女の子がスピーチを始めました。とても賢そうで凛々しい女の子で、この子が生徒会長みたいな立場になるんだろうな……と思いました。

続いて、州知事のスピーチが始まりました。

実は、先程から気になっていたのですが、なぜか、スピーチ台の周りに子供達が群がって、キャッキヤと声を上げています。しかも誰かが注意をする訳でもなく、州知事も特に気にせずにスピーチを続けています。日本ではまず考えられない風景で、これがカンボジアなのだなあと思いました。

州知事のスピーチの途中、リーマンが私達のところにやって来て、

「この後、皆さんのスピーチの番ですから、準備よろしくお願いします」  
そう言つてまた離れてゆきました。

いよいよ次だ、そう思うと緊張感が高まります。私たちは、クメール語で話している知事の話をBGMのように聞き流し、どんな話をしようかとぐるぐる頭を巡らせました。一応、準備していた話もあったのですが、実際に村の人達を前にすると、少し違和感があるようにも感じてしまい、「今、この人たちに何を伝えたいか？何を伝えるべきなのか？」をもう一度考え直しました。そして間もなく、知事のスピーチが終わってしまいました。

いよいよ私達日本人の番です。

5人の支援者の方は、つい先ほど決まった順番で一人ずつ演台に立ち、それぞれ自分の思いを伝えていきます。私たちのスピーチは、リーマンの通訳でクメール語に訳されてゆきます。クメール語に訳された言葉を、村の人達は真剣に聞いています。時には大きく頷き、時には拍手が湧き、とても素敵な光景でこの場にいられることが、とても光栄なことのよ

うに思いました。

私は一応、代表者なので、参加者の皆さんの堂々としてしっかりしたスピーチを聞きながら、「下手なスピーチは出来ないな…」と、さらに緊張が高まってきました。

これだけ多くの人達の前でのスピーチは、これまでに経験がありません。しかもカンボジアの人たちを相手にスピーチするのです。すでに今朝から特殊な体験が続いていましたが、まさにピークの体験だと思いました。

そして、私の番です。私も支援して下さった方の代表者として、恥ずかしくないスピーチをさせて頂こうと頑張りました。

『私達は、日本のたくさんさんの支援者の方の代表としてここに参加しました。

100名以上の日本の支援者の方々の協力によって、この学校を建設することができました。村に学校ができることは、皆さんにとっても大きな夢だったと思います。そして私達日本人にとっても大きな夢でしたし、今日の日が来るのをとても楽しみにしていました。村で初めての学校建設という、村の新たな歴史の第一歩となるような、大きなイベントに協力することができたことを、大変うれしく思っていますし、誇りに思っています。

これからたくさんの子供たちがこの学校で勉強し、このブラサットガート村が更に発展することを願っています。私達は今回、この学校建設の支援をしましたが、これから勉強して未来を切り開いてゆくのは、皆さん自身です。

私達の願いは、皆さんがこの学校でしっかりと勉強してくれること。そして皆さんと皆さん

んのご家族が豊かになること。そしてカンボジアの未来の発展の為に活躍する人がこの村からたくさん出てくることです。この学校の名前のように、これから日本とカンボジアの友好関係がさらに深まることを願っています。

『遠い海の間からですが、皆さんの幸せを願い、応援しているたくさんの方々がいることを是非覚えていて欲しいと思います。カンボジアと日本の平和、そして世界の平和を祈ります』

スピーチを終えた後、大きな拍手を聞きながら演台から自分の席に戻ると、ふうーっと大きなため息が出ました。ようやく肩の荷が下りたような気持ちになり、やっと落ち着くことができました。

私たちのスピーチが終わると、村の代表者のグオンサンさんのスピーチが始まりました。グオンサンさんは、現在バッタバン州（副首都）の裁判長をされています。誰よりもこの村に学校が出来ることを望んでいた一人と言えるかもしれません。

昨年私が村を訪れた時、グオンサンさんが、村をくまなく案内してくれました。そして、学校建設に対する気持ち、教育に対する思い、未来のカンボジアの発展のために考えていることなど、何時間にも渡り話してくれました。通訳のリーマンが、最後には根を上げてしまうほど、グオンサンさんの熱心な話は止まりませんでした。それでも、「まだまだ話足りない。今日はもうここに泊まって行かないか」とかなり強く勧められ、次の日の予定

を理由に、何とか辞退してホテルに戻ったということがありました。

『私は、この村で育ち、大変貧しい幼少期を過ごし、ポルポトの内戦の影響の下、とても厳しい生活環境を強いられていました。どんなに貧しくても、学校に行けなくても、とにかく私は自分で勉強を続けました。家には机がないので、正座をして膝の上に教科書をおいて勉強をし、食事をしながらも勉強しました。夜も勉強したいから何とかならないかと、釣った魚の脂に火を灯して勉強しました。学校は川の向こうにしかなかったので、舟に乗れない時は、教科書を片手に持ち、教科書が濡れないようにその手を高く上げ、泳いで川を渡って通いました。そんな貧しい環境でも苦勞して勉強しつづけた結果、私はここまで来ることができました。

私の子供の頃に比べると、皆さんはとても恵まれています。今は内戦もなく、平和な時代が続いています。しかもこのような立派な学校で勉強できることが、どれだけ恵まれた環境なのか、じっくりと考えて下さい。皆さんにはしっかりと勉強してほしいと願っています。

この村に学校を建てるという、昔からの私の夢を日本のたくさんの方々が叶えてくれました。この感謝の気持ちをどう表現したらよいのかわかりません。日本の支援者の方が、この村に初めての学校を作ってくれたことは、後世に渡って責任をもって伝え続けます。

私は、日本の支援者の方に必ず三倍の恩返しをすることを誓います。それは、学校を大切に管理すること。子供達がしっかりと勉強できる環境を作ること。さらに、未来のカンボジアの力になるような人材を育てること。日本の支援者の方が、日本が大きな震災の被

害にあった年に、自分達が大変な状況にも関わらず、カンボジアの為に寄付をしてくれた事を決して忘れないこと。これが、自分達の考える三倍の恩返しです』

グオンサンさんのスピーチを聞き、目の前にいるカンボジアの子供達が平和で豊かな環境で生きているのだとしたら、日本に生きる私達の平和や豊かさについては、一体どう考えるべきなのだろう、思わず考えさせられました。

グオンサンさんのスピーチが終わり、最後に大臣のスピーチです。

『まず我々の崇拜なる仏教の修道僧に敬礼を致します。こちらにお越しいただいている来賓の皆様にご挨拶させて頂きます。外務省顧問、そして我が最愛なる妻フン・ブントエウンにもあいさつを忘れずに。』

それから、こちらにお越し下さった支援者の皆様、そして Y. E. B Cambodia-Japan 小学校の先生方、学生の皆さん、その両親の皆さん、本日 Y. E. B Cambodia-Japan 小学校の新校舎落成式にご参加下さり、大変うれしく思っております。

そして日本の沢山の支援者の皆様、このような素晴らしい校舎を寄贈して下さい、本当にありがとうございます。本日 Y. E. B Cambodia-Japan 小学校新校舎落成式に来賓として参加できることを、大変光栄に思っております。首相からも、くれぐれも宜しくお伝えするよう、申しつかっております。

この新校舎は一棟で5つの教室がございます。この校舎は日本の支援者の皆様のあたた

かいご支援により、約5万ドルで建設され、現地スタッフの協力のもと無事に完成した、立派の校舎でございます。大変おめでとう見事な成果でございます。

学生の皆さん、自分たちの村に、こんな立派な新しい校舎が出来たのですから、ますます勉強を頑張るようお願いいたします。

今の皆さんの時代というものは社会が解放されており、勉強も自由にでき、人権も守られており、あの悲惨なポルポト時代よりも大変豊かな生活をしています。それだけでも、有難さを感じなければなりません。そしてこの平和を手にすることが出来たのは、世界の協力は支援があったからこそこのことです。特に日本という国と人々を忘れずに感謝の気持ちを常に持ち、支援者の皆様のご期待に沿うように頑張ることです。

この平和を維持することが大切であり、これからのカンボジアは今の皆さんにかかっているのです。ぜひ勉強し、立派な人間になり、将来の自分の為、家族の為、そして国の為に頑張ってください。

最後にもうひとつ、皆さん達に守って頂きたいことがあります。それは私達の美しい環境でございます。学校やあらゆる所にごみを捨てないよう、自分達の村をきれいにしてください。この学校もきれいに使って頂きたいし、次の弟や妹たちの為にもきれいな校舎を残してほしいです。そうすれば、この校舎を支援して下さいました方々もきっと喜んでくださるでしょう。

最後になりましたが、日本の皆様に改めてお礼を申し上げます。そして、皆様のご活躍、ご成長、またご健康をお祈りいたします。ぜひこちらにもお越しく下さい。ご参加して頂いた皆様、先生方、学生の皆さん、本日は本当におめでとうございます』

大臣のスピーチは1時間以上続きました。

すでに落成式が始まり2時間は経過しています。屋根があるとはいえ、テントのビニール張りの屋根では、ジリジリ照りつける太陽の熱が、日本人の私たちにはかなりこたえました。しかしそんな状況でも、村の人達は皆真剣な表情で聞き入っており、その集中力にはちよっと驚かされました。

大臣のスピーチを聞いて改めて、私達の活動が日本とカンボジアの友好の為に役立つていること、そして日本人の代表としてこの場にいられることを、とても嬉しく誇りに思うことができました。

### □メダルと感謝状の授与

大臣の長いスピーチが終わると、メダルと感謝状の授与式が始まりました。私たち日本人の名前が一人一人ずつ呼ばれ、順に大臣から感謝状が手渡されました。日本人の名前はかなり発音しづららしく、大臣が私達の名前を読むのに一生懸命な様子に、何だか親しみを感じました。感謝状のほか、今回一〇〇万円を寄付して下さった支援者の方に、カンボジア政府からメダルが授与されました。

### □テープカット



感謝状の授与が終わると、テープカットの準備が始まりました。それまでテントの下に座っていた、花道担当？の子供達が、再び広場から校舎までの道に花道を作るために走ってゆきました。私たちは、来賓用の席を降りた付近で、並んでしばらく待つようにと促されました。

準備が整うと、私たちは再び子供達の作ってくれた花道を、テントに集まったたくさんの人たちの拍手に送られながら、校舎に向かって歩きました。報道関係者その様子をカメラやVTRにおさめていました。

前に見える校舎の正面入り口横の壁面には、支援者の方一人一人の名前が彫られたプレートがしっかりと埋め込まれていました。

校舎の正面入り口に到着すると、先程レイをかけてくれた女の子が二人、赤いテープの両端を持って立っていました。テープは30センチほどの幅があり、「テープカットのテープってこんなに太いんだ」と思いました。理由は後の説明ですぐに分かりました。

私たち一人一人が順番に少しずつそのテープにハサミを入れてゆき、最後に大臣がテープを切って儀式を終えるという流れでした。

係りのおじさんが、日本人にちゃんと伝わっているのが不安なのか、若しくは、最後の大臣の番までテープがもつことを心配してか、順番にハサミを持つ私達に向かって、「ちよつとだけ」というジェスチャーを何度も何度も繰り返していました。

報道関係者に囲まれる中、私達は指示通り少しずつ順番にハサミを入れてゆきました。最後に大臣がハサミを入れて、赤いテープが2つに分かれてはらりと落ちると、一斉に大きな拍手とシャッター音とフラッシュがまぶしく瞬きました。

「ちよつとだけ」のおじさんも、満足そうに拍手をしていました。

テーブルカットが終わると、植樹をし、記帳を済ませ、食事会へと向かいました。

### □食事会

食事会はグオンサンさんの家の敷地内で行われました。私達が到着すると、すでに円卓にはおいしそうな料理がテーブルいっぱいになんて並んでいました。

お肉と野菜と香草のサラダ、魚を焼いたもの、酸っぱい辛いスープ、魚を発酵させた燻製みたいなもの、豚肉とバナナのちまき、たくさんのフルーツなど、カンボジアの伝統的な料理が所せましと並んでいます。

これらの料理はお正月やお祭りなど、特別な日に食べる料理なのだそうです。大臣や私たち来賓用に、村の人達が特別に準備した料理の数々でした。

美味しそうに並んでいる料理をみると、朝からのプログラムが一通り終わり、ほっとした気持ちもあり、急激にお腹がすいてきました。

アンコールビールで乾杯をした後、さっそく料理を頂きました。カンボジアの料理はちよつと独特な香草の香りのするものが多く、タイ料理、ベトナム料理と似ているかもしれません。味付けは意外と日本人の口に合うものが多いように思います。今までの緊張が一気にとけたのもあり、どれもこれも美味しく、とても幸せな気持ちになりました。

食事中、私達のテーブルに、料理やご飯や飲み物などをせっせと運んでくれる女の子が

いました。おそらくグオンサンさんの兄弟の子供だと思うのですが、とても愛想のいい女の子で、目が合う度に、ニコツと微笑む笑顔が、とても印象に残りました。

近くの円卓では、少し酔いの回ったおじさん達が踊りはじめたりと、盛り上がっています。その中の一人が私達のところに来て、何やら言いながら上機嫌でビールを注いで回っています。さらに隣の円卓では、オバサマ達が大阪のおばちゃん顔負けのパワーで、飲んで食べて盛り上がっていました。

こうしてカンボジア人のパワーに圧倒されながらの食事会が終わり、そろそろプノンペンに戻る時間が近づいてきました。

### □お別れの時

渡し舟に乗る準備をしていると、先程料理を運んでくれた女の子が近づいてきました。目が合うと、少しはにかんだような可愛い笑顔で、両手を胸の前に合わせて、

「オークンチュラン」（ありがとう）  
と言ってくれました。

私も同じようにあいさつをした後、互いに近づき、握手をして自然にハグしました。

なんだかとても名残惜しい気持ちになりながらも舟に乗り込みました。全員が舟に乗り終わり、岸の方を振り返ると、見送りに来てくれる女の子、グオンサンさん、村の人間達が大きく手を振り、それぞれ何かこちらに向かい叫んでいます。

リーマンはそれが、感謝の言葉と、是非また来てくださいという意味だと訳してくれましたが、私たちにはそれが、訳されないでも本当に自然にしみるように分っていました。

舟はやがてゆっくりと岸を離れました。

村のみんなが更に大きな声で、大きく手を振ってくれています。

私達もそれに応えて、「またね。ありがとう」と大きく大きく手を振りました。

一旦岸から離れると舟は流れに乗り、どんどん進んでゆきます。岸から見送ってくれている村の人達の姿もどんどん小さくなってゆき、やがて川べりの木々にも遮られ、見えなくなってしまいました。

私たちにとって、とても長かった一日が終わり、ブンペンのホテルへと向かいます。

帰りの車内での支援者のみなさんは、疲労も手伝ってか、みんな言葉数少なく、各々が流れてゆく景色を眺めていました。

私も景色を眺めていたのですが、青から紫、ピンクへと暗くなるカンボジアの空と景色が美しく、涙がなぜだかゆっくりと流れました。

私はこの時に、「もっとたくさん支援者の方にも来てもらいたいなあ・・・」と、本気でそう思いました。排気ガスは相変わらずですが、外の空気は少し涼しくなっていました。

(おわり)



## □学校について

学校の耐用年数は約50年と聞いています。これから学校に通い始める子供達の孫の世代まで、この学校は子供達に教育の場を提供し続けることになるのです。

仮に、この学校で、1年間に400人の子供達が50年間勉強すると考えると…

「400人×50年＝20000人」

これからこの学校で、約20000人の子供達が勉強することになるのです。

今回の建設費用が約400万円ですから、1万円で50人（1000円で5人）の子供達に教育の場を提供していると考えることができません。

支援者の方のご寄付が学校という形に変わり、これからもずっと村の子供達を支援し続けることになるのです。



## ■ 2 日目

### □ トウルスレン

前日の感動も冷めないうちに、朝からびっしりと予定が入っていました。今日の予定はトウルスレン博物館、くつくま孤児院訪問、バスツクスラム訪問です。

トウルスレン博物館、ここはポル・ポト政権時代、政治犯と見なされた人達を収容する為の刑務所だった場所です。

ポル・ポト政権では、主に知識人（教師、僧侶、文化人、役人、学歴のある人達）を中心に、当時カンボジアの総人口800万人のうち、150万人と200万人が虐殺されました。国の人口の4人に1人が内戦で殺されるという、想像のつかないような事実です。

門をくぐると、広い中庭があり、大きなヤシの木が何本も並んでいます。一見のどかな景色にも見えますが、薄暗い灰色の大きな建物がその中庭をぐるりと取り囲んでいて、少し不気味な感じがします。

入口に程近い一番手前にある棟が尋問室です。鉄骨のベッド、足枷や鎖、拷問に使う様々な道具が置かれています。部屋の壁には今でも血痕が残っています。

隣の部屋には、この場所で収容されていた人達の写真が所狭しと張られています。大人から子供まで、約10万人の人達がこの場所に収容され、拷問を受けたのだそうです。その中で生き残ることが出来た人はたった7人だけ。わずか2年9か月の間に、約10万人もの人達が、この場所で激しい拷問を受けながら命を落としていったということを想像すると、



余りにも苦しくてその場にいられなくなりました。

ポル・ポト政権が終結してからまだ30年ほどしか経っていないカンボジア。この国で生きる多くの人達が、ポル・ポトの時代を経験していることになりました。子供も大人も、きつとまだ癒えていない心の傷を負いながら、今を生きているように思います。

最近では、外資の企業も増え始め、カンボジアの経済も大きく発展してきています。それでもやはり、海外からの援助を必要としなくなるまでには、まだまだまだ時間がかかりそうです。

街の景色を見ると、「戦後の日本もこんな感じだったのかも知れないな」と思ったりします。日本は今年で戦後67年目を迎えました。これからのカンボジアがどのように発展してゆくのかはわかりませんが、支援をするということは、私達が忘れてしまっている大切な何かを思い出す：：そんなきつかけになるのかも知れません。

トゥールスレン博物館を後に、少し重苦しい気持ちになりながら、くつくま孤児院へと向かいました。

### くつくま孤児院

くつくま孤児院はプノンペン市内にあります。この孤児院には3歳から17歳まで26人の子供達が共同生活をしています。ここで生活している子供達は、幼い頃に両親をHI Vで亡くしていたり、両親が貧困や病気の為に育てられなくなったり、出稼ぎの為に預けられている子供達です。（預けられてそのまま引き取りに来ないこともあるようです：：）、みんな様々な事情があり、ここで生活しています。

これまでも何度か訪れています。昨年までは、今にも壊れてしまいそうな、とても薄暗くじめっとした木造の建物でした。しかし今年の2月、在日韓国人の方の支援により、とても綺麗な建物が建てられたのでした。

現在の孤児院は、日本のNGOの支援により運営されています。それ以前は、子供達に伝統舞踊の指導をしている先生達が、自分たちがイベントに参加して稼いだお金を出し合いながら、子供達を養っていました。

当時の生活は、その日食べるのがやっとでした。近くにあるホテルから、料理に使った後の魚の骨の部分をもたらってきたり、近くのご飯屋さんから余ったスープをもらい、そこに少しの野菜を入れて食べていました。おかげにしよう油をかけて食べるだけの日も多く、1日1食だったり、それすら食べることができず、子供達は毎日お腹を空かせて生活していました。

そんな貧しい生活が続き、とうとう家賃も払えなくなり、これから一体どうしようかと途方に暮れていた時に、日本のNGOからの支援の話がきたのだそうです。

このように子供達は皆、ご飯を食べたくても食べられない時を経験しています。だから今、毎日おかずのついたご飯が食べられることが、とても幸せなのです。両親がいないだけではなく、ご飯もろくに食べることの出来ない辛い時期を経験しているからこそ、今の孤児院での生活は、夢のような生活なのです。

また、物が無いからこそ、奪い合うのではなく分け合うことを知っています。日本が震災の時に、支援物資を分け合い譲り合う様子が外国から評価されていました。くつくまの子

供達も、皆で物を分け合い助け合いながら、力を合わせて生きているのです。

今回の建て替えの話も、以前の建物の大家さんから立ち退きを命じられ、新たな行き場所がなく困っていた時に、運よく新しく建て替えてもらえるという話が来たのだそうです。子供達が支援してくれる人達への感謝の気持ちを忘れずに、毎日を一生懸命生きているからこそ、そんな風に運も味方してくれているのだらうなと思いました。

私たちが孤児院に到着すると、すでに子供達全員が建物の外に並んで待っていました。みんな飛び跳ねながら手を振ってくれています。そんな子供達の笑顔を見ると、先程の重苦しい気持ちはどこかに吹っ飛んでしまいました。

何人かが私達のところへ駆け寄ってきました。  
「ヨウコソ オゲンキデスカ？アナタノナマエハナンデスカ？ワタシノナマエハ〇〇デス」

と、片言の日本語で話かけてきます。

気が付くと両腕には、すでに4、5人の子供達の腕がからみ、手をつながれ、あれよあれよと引つ張られながら、建物の中に連れられてゆきました。

中に入ると別の子供達が、私達一人一人に椅子を運んでくれました。これまた上手な日本語で、

「ドウゾズワツテクダサイ」

と声をかけてくれます。

言われるままに椅子に腰をかけると、今度は小さな男の子がかけ寄ってきて、手に持っているうちわで一生懸命仰いでくれるのです。さらに別の女の子が、ミネラルウォーター

「持つてやってきました。」

「オミズドウゾ」

というのと、両手で丁寧に手渡してくれました。

あまりの子供達の歓迎ぶりとは心遣いに一同びっくりです。

私達全員が席に着くと、子供達はきちんと整列し、

「ミナサン コンニチワ ヨウコソ オコシクダサイマシタ。アリガトウゴザイマス」

と声をそろえて元気に挨拶をしてくれました。それから一人一人、日本語での自己紹介が始まりました。

自己紹介の後は、カンボジアの伝統舞踊を披露してくれました。子供達は、毎朝5時に起きて伝統舞踊やダンスの稽古に励んでいます。踊りをマスターしてイベントなどと呼ばれることができると、お金がもらえるからです。少しでも自分達でお金が稼げるようにと、子供達自身も支援に頼るだけではなく、様々な努力をしています。

さらに子供達は、時間があつたら本を読み、勉強をし、学校の成績もとても優秀な子が多いのだそうです。子供達にとって、今学校に通えることが何より幸せなのです。

親がいないから、将来は自分の力で生きて行かなければならないということを、幼いころからしつかりと自覚しているのです。だからこそ踊りの稽古にも真剣に取り組むし、勉強も一生懸命するのです。みんなそれぞれ自分の将来の事を考え、その為にスキルを身につける努力を惜しみません。

「今生きていることに感謝して、自分に出来ることを精一杯努力する。それが生きるとい

うこと」

子供達に、そんなことを教えてもらったような気がします。

そうは言っても、お母さんがいたら甘えたい年頃の子供達ばかりです。両親がいないのは、どんな子供にとっても、さびしくて辛いことだと思います。

みんな甘えるように腕をからめてきたり、手をつないだり、膝の上に乗っかったり、べったりくっついて離れません。お母さんにはなれないけれど、今この時間を一緒に楽しむこと、一緒に遊ぶこと、一緒に笑うこと、歌を歌うこと、抱きしめてあげること、これが今できることなのかなと思いました。そして、26人の子供達と一緒にひとときの時間を楽しみました。

最後はみんなで手をつなぎ、輪になって歌を歌いました。そうしているうちに、いよいよお別れの時間となりました。

「もう帰っちゃうの？」と残念がる子供達。

「次はいつ来る？また来てね！」と寂しそうに見つめています。

門をでて、目の前に止まってある車に乗ると、子供達が車の周りを取り囲み、窓越しに笑顔で手を振ってくれています。思わず窓ガラスをあげ、子供達と手を握り合いました。

「そろそろ出発しますよ」

の声で窓をしめると、車がゆっくりと走り始めました。車が走り始めると、子供達も一緒に走りながら追いかけてきます。やがて車に追いつかな

くなると、そこで立ち止り、姿が見えなくなるまで、ずっと手を振り続けてくれました。

#### □バサックスラム

くつくま孤児院を後に、次はバサックスラムへと向かいました。ここはプノンペン市内から車で30分ほど走ったところにあるスラム地区です。

もともとこのスラムは、プノンペン市内にありました。しかし2006年に政府の都市計画の一環として、スラム一帯は郊外へ強制移動となりました。移されたその場所は、市内からは離れており、土地の水はけも非常悪く、周りには何もない場所でした。もちろん家が用意されているわけではありません。市内まで仕事に行くにも、食糧を手に入れるにも、歩いていける場所ではありません。お金も交通手段もない人達にとって先の見えない生活が始まりました。

強制移動から6年が経ち、現在では海外のNGOからの支援も入り、生活環境もかなり改善されています。しかし水はけの悪い地質では、少し強い雨が降るとすぐに浸水してしまいます。下水も整っていませんから、雨季になると、ごみが沢山浮かんだ汚水があふれかえります。

これまでも何度か訪れています。ボロボロの木やタン板を合わせた上にビニールシートを乗せただけの家や、バラックを組み立てただけの家が、相変わらず所せましとしめき合っています。そしてその周りには、ゴミが散乱した汚い水たまりがそこらじゅう

に出来ています。

多くの家の入り口にはドアもなく、6畳くらいの小さなスペースに、家族4〜5人で住んでいるケースが多いようです。

ここに住む多くの人達は、以前はゴミ山でゴミを拾う事を仕事にしていました。今はゴミ山が遠くに移転した為、工場や工事の仕事をしている人が多いのだそうです。それでも賃金は、一日10000〜20000リエル。日本円で200円から400円位です。カンボジアでもその賃金では一家が中々生活ができるわけではありません。そのため、お父さんとお母さんが出稼ぎに出てしまい、小さな子供と、おじいちゃんおばあちゃんだけがスラムに残り、一緒に生活しているケースも多いようです。

また、ここに住む大人のほとんどが読み書きができません。そのため良い仕事に就くことが難しいのです。さらに教育を受けていない為に、子供へのしつけや教育についても知識がありません。そのために、子供に対する衛生管理もしつかり出来ていない事が多いようです。不衛生な状態から感染症になってしまったり、着替える服がなかったり、着替えさせてもらえなかったり、おもらしをしてもそのままの状態で過ごしている子供達も多いようです。

このスラムにも日本のNGOが支援している孤児院があります。孤児院というよりも、屋根はあるけど壁のない小さな集会所みたいな場所です。そこに20人以上の子供達が寝泊まりをしています。日本以外の国からの援助もあり、子供達は学校に通うことができます。

すし、毎日ご飯を食べることもできます。ここの孤児院の子供達も日本語を勉強しているので、カタコトの日本語が話せます。

この孤児院に住むスレイトという女の子の話を聞きました。お父さんがおらず、お母さんもスレイトを出産してしばらくたった後亡くなってしまい、おばあちゃんに預けられていました。おばあちゃんの住む田舎は貧しく学校ありません。スレイトは学校に通うために、従妹を訪ねてバサックスラムにやってきました。学校に通えるのが嬉しくて、人一倍勉強も頑張り、学校でも一番の成績を取るようになりました。

あるお正月、おばあちゃんの住む田舎に帰った時、おはあちゃんはかわいい孫と離れることがとても寂しくなってしまう、しばらくまた田舎でのおばあちゃんとの生活に戻りました。スレイトも可愛がつてくれるおばあちゃんと離れるのは寂しかったのだと思います。

しばらくして、NGOのスタッフの方が様子を見に行きました。

「このまま田舎でおばあちゃんと一緒に生活してもいいし、バサックスラムに戻ってもいいし、スレイトはどうしたい？」

と、尋ねました。すると、

「私、やっぱりバサックに帰る。学校へ行って、いい仕事について、大きくなったらおばあちゃんを助けられるようにがんばる。」

と言い、再び戻ってきたのだそうです。



学校に通えるということは、まだまだカンボジアの貧しい田舎では当たり前前の事ではありません。貧しくて家の仕事や手伝いの為に学校に行くことが出来なかったり、学校に行きたくても近くに学校がなかったり、様々な問題が残っています。

だからこそ、子供達にとつて学校に通えることや、勉強ができる環境があるということは、とても豊かなことなのです。子供達は小さな時から、自分の将来の事を考え、学校に通い、よい仕事について家族を助けたいと考えているのです。

孤児院の子供達と一緒に遊んだ後、再びお別れの時間となりました。

200メートルほど離れた場所に私達の車が止まっており、みんなそこまで見送りに来てくれました。

道を歩いていると、後ろから小さな女の子走ってやってきました。ニコニコしながら私の顔をじつと見つめ、何か握っているような小さな手を私の前に差し出しました。立ち止って女の子の前にしゃがむと、握ったその手を私の手の平にそつと乗せてきました。女の子の顔を覗きこむと、ニコツと笑いながら私の顔をじつと見ています。女の子の手の甲をゆび指し、

「なにが入っているの？」と尋ねてみました。

女の子はニコニコしながら、ゆっくりその手を広げました。すると私の手の平には、小さな小さな白い花がちよこつと乗っかっています。

私はその花を大事に握りしめたまま、車に乗り込みました。

子供達とのお別れのあいさつが終わると、ゆっくりと車が走り始めました。座席から後ろを振り返り、車の後ろを走ってついてくる子供達に手を振り続けました。

子供達の姿が見えなくなると、前を向き元もの状態に戻ると、先程もらった白い小さな花をしばらくじっと見つめていました。

長く充実した一日が終わり、ホテルに戻りました。ベッドの上で目を閉じると、孤児院の子供達の笑顔が次々と浮かんできました。

「次はいつ会えるかなあ」と思うと少しさみしくなりました。

## □帰国の日

最終日、リーマンとピロームは、アンコールワットに向かう参加者と一緒にシエムリアップに向かいました。プノンペンに残った私ともう一人の参加者の方を、井戸さんとKHJの別のスタッフのチャントールが、王宮に案内してくれました。チャントールが、たどたどしいながらも、思いつく限りの日本語を使いながら、一生懸命案内してくれる様子がとても微笑ましく感じました。

一通りの観光が終わり、ちようどお昼になったところで、

「お昼ごはん何食べますか？日本食食べますか？」

どうやら、チャントールが日本食を食べたかったようで、嬉しそうにおすすめのお店に連れていってくれました。

昼ごはんを食べた後は、市場をぶらぶらしたり、買い物をしたりと、慌ただしかったこの2日間が嘘のように、出発の時間まで、のんびりとした時間を過ごすことができました。

20時30分発のバンコク行き飛行機に乗るため、18時すぎ、空港に向かって出発

しました。空港には市内から車で30分程で到着します。今から日本に帰るのだと考えると、少しさみしい気持ちになりました。蒸し暑くて埃っぽいようなカンボジアの空気が、何だか名残惜しく感じます。市内を出た時は、外はまだ夕暮れ時のうつすらとした明るさがありました。が、空港に到着する頃には、かなり暗くなっていました。

空港に到着すると、入り口は多くのカンボジア人で賑わっていました。握手をしたり、抱き合ったり、大きな声を掛け合ったりとても賑やかです。カンボジアでは、海外へ向かう時、家族や親せき一同で見送りに行くそうです。がやがやとした雰囲気のおかげで、私もしんみりすることなく、空港まで送ってくれた二人ともお別れすることが出来ました。

搭乗手続きを済ませ、すこしゆっくりすると、いよいよ出発の時間となりました。機内へと進み、座席に座りました。窓から外を眺めると、もう辺りは真つ暗です。滑走路には、同じようにこれからどこかの国へ向かう飛行機が並んでいます。その向こうには、ポツポツと灯りが光っています。そんな光景を見ると「これから日本に帰るんだなあ」としみじみとした気持ちになりました。

エンジン音が大きくなり、グオーつという大きな音を立て、重力を発生させながら、飛行機は地上を離れ、高度を上げてゆきました。窓から見える景色がどんどん小さくなってゆきます。ポツポツと見えるネオンや灯りもだんだんと小さくなりやがて真つ暗になりました。